

## 第 1 章および基本理念についての委員意見

平成 26 年 6 月 4 日（水）開催

平成 26 年度第 1 回「新潟市子ども・子育て会議」について

（会議前・会議後の意見を含みます）

## 【第 1 章について】

No.	ご意見
1	<p>○子どもに関するものが少なく、親の就労状況、親の意識調査に偏っているように感じる。保育園、学童保育などを経験した中高生などの満足度は調査されていないのか。</p> <p>○軽度発達障がいの子どもたちについて、就学前に保育園などでどの程度子育てに困難を感じられているお子さんがいるか把握はされているか。就学時の事前調査などで支援が必要な子どもたちはどの程度いるか。就学前の乳幼児健診などでどの程度こういったお子さんを把握し、対応できているか、「はぐはぐ」などに通園したその後のお子さんたちの経過について数値化はできるか。</p>
2	<p>○ニーズ調査結果「子育てについて感じること」について、誇れるデータなので、もっとアピールして、新潟は住みよい場所なのだということをアピールすると良い。数字だけだとわかりづらいので、わかりやすい図を使うと良い。</p>
3	<p>○子育ては楽しいし、不安も感じないし、負担も感じないという方が多いのに、子どもは産みたくないというところは何か原因があるのか。</p>
4	<p>○子どもたちが成長して大学を選ぶときの動機というときに、学費の問題というのが今親御さんの中ですごくウェイトを占めているような気がする。そして、奨学金を借りると、今度は奨学金貧困というか、卒業した途端に就職もしていないのに、子どもたちが負債を抱えているという現象が起きてしまうとか、そういうことがある中では、新潟市あるいは新潟県の所得水準も、育てにくさの視点として必要なのではないかなと思います。新潟県の所得水準というのは、大体推測できると思うのですが、非常に平均より低いということはデータとしてある。そうすると、やはり学校出すにしても経済的な部分というのはもう抜きにできないということで、お母さん方は家庭で子どもと一緒に過ごせば、それはそれにこしたことはないけれども、子どもを育てていく中でどうしても働かざるを得ないという現状が新潟県あるいは新潟市にあるとすれば、そののところもどこか着目していかないと一面的な見方になってしまうから、この親の就労というものをしっかりと分析しないと、一面的な分析になるような気がしている。</p>
5	<p>○構成別世帯数の推移を見ると夫婦、子どもと親からなる世帯と 6 歳未満の子どもがいる世帯というのが右肩下がりでずっと下がっている。いわゆる 2 世帯住宅、3 世代同居しているというものがまず減っているということになる。この 4 月に消費税が上がるときに住宅がたくさんできたが、例えば巣づくりということを考えると、新潟ではまだ一戸建てを建てることが多いので、例えば多世代の世代住宅など、そういう巣づくりを推進していくことによって、例えば子どもをみる人がいるというような環境ができていけば、この資料の課題というのは結構解決するところがあるのではないかと思う。多世代で住めるような環境、住宅、巣づくりというものを市のほうでも応援していけるといいかと思う。</p>
6	<p>○親の収入によって行く大学を決めてしまうということがすごく大きく、国レベルでいえばインドではもう教育はほとんど大学レベルまでお金は無料で、国が全て負担をするということで、それによってものすごく貧しい子どもでもお金持ちの子どもでも同じレベルの教育が受けられるということで、すごく国が発展した。それで、その辺の問題は地方レベルではなくって、ぜひとも大学に</p>

	<p>本当に能力がある子どもはお金を気にせず教育を受けられるような体制を国レベルで考えていかないと、本当に少子化と子どもたちの教育がひどくなってしまふ。親が一生懸命働いてお金を稼ぐところを子どもたちは見ている。一生懸命働かないといい学校には行けない、お金もかかるということ、子どもは親からそれを学んでいる。親が一生懸命働いてもこのレベルでの生活しかできないということを知っている子どもは、親に遠慮して奨学金を借りて、就職、いいところに行けばいいけど、親の思うようなどこに行けなくて、お金を返していく。自分の行きたいところではなく、お金を稼げるところにアルバイトを幾つもかけ持ちしてとか、そういう子どもは本当にいるので、ぜひとも教育レベルだけは国を挙げてお金がかからないで、誰でも能力のある子どもたちが全て能力のあるところに行けることを望む。それは全て国に戻ってくると思う。それが今成功しているのはインドだと思う。アメリカのほうでは、IT企業はインドの何々大学の卒業者を希望しますと、そこまで教育のレベルが上がっている。日本をどこに持っていくかというのは今の子どもたちにかかっているので、その辺を地方レベルではなく、国レベルで変えたいと地方から発信していただきたい。</p>
7	<p>○大学の無償化による少子化対策の効果というのがあるのではないかとすることは皆何となくイメージしている中で、国レベルで対応すべきだということはそのとおりだと思うが、一方で我々がこうやって政令指定都市の中で1つの子ども・子育て会議というものを組織している一番の理由は、地域ごとによって、国全体ではなくて、きちんと地域地域で対策を考えていくべきであるというのが根底にある中では、国に地方から発信していくためには、新潟市こそそういった教育環境の支援みたいなものをしっかりやっけていこうとか、そういうことをここから提言していくことが大事なのではないかと思う。</p>
8	<p>○子どもを育てやすいか、育てにくいといったときに、学校という視点を持ったときにどうなのかなというのが1点ありました。学校の現場の中でいい学校が多い、先生が多いというのが、新潟市として数値化ができるのであれば、一つのアピールポイントかと思う。例えば不登校が少ないとか、いじめが少ないとか、そういうのは大事だと思う。</p>
9	<p>○少子化と言われるこの言葉が、お母さんたちにとっては子どもを産みなさいというメッセージになっている。子どもを産むことが国のほうから、もういろんなところから言われているけれども、産んだ後の保障というものが少ない。例えば子育て支援センターも、10年前に比べると非常に多くなっているなど、いろんな支援ができていて、放課後児童クラブに関しても、預かり保育に関しても同様であるが、その後の本当に教育に関するものというのにはお金がかかる。いろんな塾も、今もう早期教育ということであることや、さまざまなことがプラスされていて、産め、産めと言いつつも、さまざまなお家で家庭によっては大変な苦勞をされていることが多い。そういったことがメッセージでメディアでも新聞にも取り上げられていることによって、結婚を考える若者たちが子育てって大変だよなという負のイメージになっているというのはある。やはりこういった事業計画など、様々なところでプラスメッセージを入れていかないと、目につくところで子育ては大変だ、子どもを産まなくてはいけないということが言われている中で、本当に独身の方とか不妊で悩まれている方、子どもを産めない状況の女性が苦しめられているというような現況もありますので、何か手だてがないのかと思う。な具体的なことは言えないが、ただ今後こういった計画にしても何にしても、せつかく子育ては楽しいというような数字も高く上がっていますので、何らかの方法でプラスのものをメッセージに入れていただけたら良いのではないかと。</p>
10	<p>○第1章冒頭のページについて、少子超高齢社会となっているというのはデータとしてはそのとお</p>

	<p>りであるが、昨今は明けても暮れても新聞の報道等も少子化とか、人口減少とか、そのような問題ばかりなので、これに対する何か別の、少し角度を変えればこういう光、可能性があるというようなことを出すことができれば良いのではないか。</p>
11	<p>○第1章1ページの「仕事と子育てを両立できる環境が必ずしも十分でない」というのは、「必ずしも」を取って、「十分でない」と、最初に問題意識を持ってかかったほうがいいのではないか。必ずしもというと、相当やっばりある程度環境整備がなされているけれども、一部十分でないというふうな意味合いにしかとれない。今私どもは、やはり強い危機意識を持ってこのいろんな問題に取り組む必要があると思う。</p>
12	<p>○データであらわされることも大変大事であるが、データというのはアンケートの結果で、アンケートの中の選択肢の中からあえて自分が選択すればこうだということになるので、そういう意味での一つの目安にはなるが、それと同様ぐらいに自由記載意見にも重きを置いて採用すべきと思う。</p>
13	<p>○計画の対象について、「すべての市民」をより分かりやすく、「すべての市民・市内団体・市内企業」としてはどうか。</p>
14	<p>○指標として、「子どもを産みたい人数」と「現実に育てている人数」を入れてはどうか。</p>
15	<p>○「(3) 就労の状況」の13ページ「保護者の就労状況」に関し、「子ども・子育てニーズ調査」(以下「ニーズ調査」)のデータを元に、特に母親の就労状況や夫と妻の生活時間の比較についてもう少し掘り下げるべきではないか。</p> <p>「素案」13ページ上段のグラフでは父親・母親のいずれがフルタイム勤務かパートタイム勤務かの記載がないが、同ページ下段の保護者の帰宅時間に関するグラフや14ページの夫婦別育休取得状況のグラフと並行して見てみると、フルタイム勤務の父親とパートタイム勤務の母親という世帯が共働き家庭の就労状況としてもっとも多いことが推察される。また、先の「子ども・子育て支援ニーズ調査」では、就労していない母親の今後の就労希望で「パートタイム、アルバイト等」との回答が、新潟市のすべての区で5割(もっとも多い区では8割超)を超えており、今後も「フルタイム(夫)×パートタイム(妻)」世帯が共働き家庭の標準的な形態として増加していくことが予想できる。</p> <p>一方、総務省の労働力調査の統計資料を参照すると、国レベルにおいても、専業主婦世帯の減少とともに、妻がフルタイム勤務の世帯も緩やかに減少し、「フルタイム(夫)×パートタイム(妻)」世帯の構成比が増加している。また、同省の統計資料で夫婦の生活時間を比較したデータ(社会生活基本調査)を見てみると、夫が家事・育児等に從事する時間は平均して一日のうち50分足らずと、妻に対しておよそ3時間(平均)の開きがある。これらのデータと、ニーズ調査の自由記載欄にある「生の」意見を複合的に見ると、子どもや子育てを生活の中心に考えた場合、父親の就労環境が変わらない中、出産等を機に正社員を辞し、家庭責任のほとんどを担わざるを得ない母親が、尚且つ生活の維持のためにパートタイマーとして従事する必要がある家庭が決して少なくないということではないだろうか。</p> <p>ニーズ調査回答者の9割が母親である中、自由記載意見には保育所(病児保育含む)や医療費助成の改善を求める内容の比率が高く、子どもを持つ母親の、仕事(経済)と家庭(生活)とのアンバランスな状況に対する声が多数寄せられていると感じた。それぞれの家庭(特に母親)が理想とするワークライフバランスを実現することが、子どもや子育てを取り巻く環境をより良い方向に導く重要なキーワードの一つとして「子ども・子育て支援事業計画」の策定の中で位置づけられるべきと感じ、母親の就労状況や生活時間に関する指標の記載を提案したい。</p>

【基本理念について】

No.	ご意見
16	<p>○どのような大人になる準備を子どものころにしてもらいたいかということについて、人は人のために生きることで自らの存在価値を認め、生きる気力が生じることということで、震災の後にそのような話もありましたが、ともに生きるということについては、誰かのために役立っていることを実感することで自分自身の存在に肯定感を持つことができると、この自己肯定感こそ今の子どもたちが持てないで困っている感覚であり、ユニセフが行ったアンケートで、日本の子どもたちだけがずば抜けて“I feel lonely”と答えている数が多い事実もある。一人一人の子どもたちの個性を尊重して、みんな違ってみんないい、ともに生きる大切さ、例えば1人はみんなのために、みんなは1人のためにというような内容を盛り込みたい。</p>
17	<p>○子どもたちが「自分が愛されている」と実感できるように育ててほしい。</p>
18	<p>○子ども愛されているという実感が持てるということがやっぱり大事だという意見があったが、自分自身が愛されているということはつまり大切にされている、それが結局自己肯定感につながるわけで、その自己肯定感ということも意見がでていたが、自己肯定感そのものは、保護者が自己肯定感を持っていないことが、子どもが自己肯定感を持ってない一番の要因だろうと言われているので、保護者もいろんな学習、研修あるいは人とのコミュニケーションの中でそういうことを学んで、そして自分の子どもについては、教育というものはいかに褒めるかということですから、そういうことからかかっていって、自己肯定感を育むような保育、子育てをする必要があると思う。</p>
19	<p>○お互いがお互いを大事にする、一人一人がみんなを大事にするという意見もあったが、そういう中でこの郷土、新潟県なり新潟市なりを、こういう自分の住んだ、生まれ育った、育ててもらった、生活した、そういう郷土というものに対して愛着を持って大事にするというような意識を持たないと、増田元総務大臣が全国の都市の中で相当数がなくなっていくという発言をされていたが、結局我々は人口の自然減と同時に社会減ということをやはり捉えなくてはいけないと思いますから、社会減というものを抑えるには、いかにここにとどまるか、あるいは外へ出てでもまた戻ってくるという体制をとる必要があるので、そういう意味では小さいときから本当に地域を愛する、社会を愛する、新潟を愛するという、そのような環境を整備して、みんなの力でそういう空気、条件をつくり上げることが必要なのではないかな。</p>
20	<p>○現行計画「すこやか未来アクションプラン」では、「夢を持ってすこやかに育つ」ということである。これからまた新しい制度になってバージョンアップしていくわけなので、子育て支援をした結果、夢では終わらずに、その夢を実現できる子ども像というのをもう少し盛り込んでいったほうがいいのではないかなと思う。郷土愛とか自己肯定感という言葉があったが、この制度、方針で、支援された子どもたちがこんなふうになりたいんだと思いを持ったら、それが実現できて、またこの地域で活躍できるような、そのような人間づくりを理念として盛り込んでいただければ良いと思う。そこで、「夢を持って」ではなく、今度は、「夢を持った結果、それが実現できる」というところを盛り込んでほしい。</p>
21	<p>○同じく、夢を持つだけではなくて、その夢が実現できる社会づくり、地域づくりということをやひ入れていただくと良いと思う。</p>
22	<p>○どのように子どもに育ててほしいかということについて、自分の命も、友達、他者の命も大切に子どもに育ててほしいと思う。命を大切にすることは、他者の存在丸ごとを受け入れるということで、自分と違う他者、身体的にも価値観も違う他者を排除しないということで、丸ごと</p>

	受け入れる、ともに育ち合いながら生きるという福祉教育の推進ということになるが、そういったことを盛り込まれると良い。
23	○地域の子どもは地域で育てるというキャッチコピーを提示し、自分の地域で実行しているが、保護者だけではなく、地域も何らかの形で子育てを支援したいということで、地域と学校との関係、放課後の子どもたちみてきた。自治会館で放課後の子どもたちを預かっていたこともあり、地域を挙げて子育てを支援している。やはり自治会の力というのは結構ある。自治会やコミュニティ協議会において、何らかの形で子育てを支援するという点について、全市を挙げてその体制を組めたらいいと思う。
24	○キャッチフレーズとしては、世界に羽ばたく子どもを育てる新潟ということで、日本だけではなくて、世界にこれから飛んでいくような子どもたちを育てる体制というのも何かないかと、勉強だけでなくスポーツでもよい。そうすると、ああ、あの人は新潟の育ちの人だねと、そういった今いる子どもたちに将来どういった、世界に羽ばたく何か方策がないかということをお願いしております。 歴史を見ると、確かにヨーロッパのほうも、北欧のほうもいつきは子どもが少なくなっていて、それから、中国のほうでは子どもを産まないでくれという政策をしたが、それでも子どもが欲しいから、戸籍のない子どもがいる。今は逆に子どもが多い国のほうが経済力の強い国、将来強くなっていくのではないかと、そういった政策を幾つもの国がとっているはずである。昔は、産めよ増やせよということで、人間の力、農機具とか、そういった兵力じゃなくてもっと違う世界に入りましたから、ここに関して、別の観点から、それほど子ども要らないのではないかと、今いる子どもたちを大切に育て、将来その子どもたちがまた別の世界を考えてくれればいいと、別の日本を、新潟をつくってもらいたいという形では、今十分教育の面でも新潟はやれるのではないと思う。スポーツが得意な人はそこを伸ばし、絵画の得意な子どもたちはまた伸ばすような場面をつくる、それは幾らでも、新潟は音楽文化会館もありますし、いろんなものを活用してやってほしい。その中で何か新しい言葉があれば皆さんに考えていただいて、新しい計画の中に入れてほしい。
25	○最近の子供の名づけの傾向なども参考にされてみればいいのか。数年前から子供の名前に「心」や「翔」を使っている方が増えているように感じる。「優しい心」「美しい心」「大空を翔る」など、名づけにこめられた想いを参考にすることで、今現在、親として子どもを育てている人が、どのように子どもに育ってほしいと思っているのかがわかってくるのではないかと。また、子育て世代の考えをくみ取り、反映することで新潟市の支援事業計画の理念に対して共感を得ることができるのではないかと。
26	○「自己肯定感」という言葉が何度か出てきたが、子育て中の親にとっても欠けていて育児に自信が持てない人も多いと思う。自分の場合は、子育てをはじめてからどんどん自己肯定感が失われていった。育児中、自己肯定感の持ち方もわからず、その状態で子育てをして、自己肯定感をもてない親に育てられる子供たちが自己肯定感を持つためにはどうすればいいのか。子どもの「心」の育ちをはぐくむような支援をお願いしたい。そして、その親にも「親の心」を育てていけるような応援をお願いしたい。
27	○一母親の立場から、我が子も含めてすべての子どもたちが「自らをかけがえのない存在として認識し、生きていくことに喜びを感じられる」よう育ってほしい、と願う。 「夢を持って…」というのも、確かに子どもへの願いの一つではあるが、国内外に様々な問題を抱えている現代社会にあって、どちらかと言えば閉塞的なムードが漂う中では、将来を担う子どもたちは過剰な期待を背負わされているような風潮があると思う。その意味で、「夢を持つ」という

ことが、「もっともっと頑張らなければならない」という子どもへの無言の圧力になる危険性も孕んでいると考える。先日の会議において、「自分自身の存在に自己肯定感が持てる子どもに」というご意見を興味深く拝聴したが、自分の良い面を肯定的に認める自己肯定感にとどまらず、自分の良い面も悪い面も含めたありのままを受け入れる「自尊感情」を持てることがより重要なのではないか。自己肯定感や自尊感情を高く持つ子どもは、他者との関係性において自分自身をかけがえのないただ一人の存在と認め、きたるべき時に自らの意志で人生を選び取る＝周囲の大人や社会からのプレッシャーによって色づけされたものではない、自らの描く「夢」を持って前進する、ことにつながると思う。

また、夢を持ち、それを実現するための過程においては、様々な困難に直面することも常である。そうした状況に置かれた子どもたちが、「自分はダメだ」と諦めることなく、困難を乗り越えようとするか否かは、やはり高い自尊感情の保持が拠り所となるのではないだろうか。

自分自身の子育てを通して日々実感していることは、大人のペースや生活に合わせて子どもの進むべき道を教え諭したり修正したりするのではなく、子ども一人一人の「ありのまま」を受け止めることの大切さである。ありのままの自分を受け止めてもらえた子どもは、その子自身や周囲の人々（動植物や自然環境など、必ずしも人のみに限定されない）を慈しむ心や確固たる意志を「自分の力で」育んでいくことができる。そんな子どもたちが育つ社会こそ、夢や希望に満ちていると考える。